



保育施設設計にみる子ども用デザインの考え方 — 北欧を中心に世界の国を比較してみると —

北浦 かほる
NPO法人子どもと住文化研究センター理事長
(大阪市立大学名誉教授)

3. 外部空間の扱いと園庭の構成

日本では室内外をつなぐ廊下やテラス・バルコニーなどの中間領域が有効な遊び場として使われていますが、欧米をはじめとして韓国では、室内空間と外部空間のつながりはほとんど重視されていません。温暖で四季の変化のある日本の風土性が、開口部の大きい木造の開放的な住まいと相まって、広縁・縁側などの内と外をつなぐ空間領域を発達させてきたことがわかります。

子どものための園庭のあり方について世界的に見て行くと、国によって相反する2つの考え方がみられます。まず、自然や緑を取り入れ芝生や緑地の広がりのある園庭を追求しているのがデンマークです。寒く、日が短い冬に代表される気候のため、子どもを自然の中で育てる努力をしています。

それに対してもう1つは、韓国やアメリカなどに見られる大型遊具中心の人工的な園庭です。韓国では屋上や中庭のコンクリート床にカラフルな大型遊具を設置しています。

アメリカでは子どもの安全を重視しているため園庭を柵やフェンスなどで年齢別に区切り異年齢の子が混じらない様にして、発達年齢に合わせた大型遊具を置いています。そして大型遊具の周囲には木屑をクッション材として深くまで敷き詰め、子どもの安全を確保する努力をしています。

同じ発達レベルの子どもを集めることで、怪我や事故が起こらない様という合理的な配慮が多くある保育園でなされています。異年齢の縦割り集団を意識的につくっている日本と、対照的な考え方と言えます。

一方、デンマークでは建築物の再生利用と子どもが自然の中で育つことが出来る様に、移動型や森の保育園にすることで森や林の中で過ごす機会を増やしています。

「移動保育園」は都心の教会等の一室に集まり、毎日バスで30-40分の距離にある広い外部空間をもつ古い農家に行き終日過ごします。子どもの集合施設と移動先の2拠点をもつ事で、親の利便性と子どもの活動空間を確保しています。

古い民家の利用・再生という点でも非常に興味深い使い方です。移動保育園では人気のフェイスペインティングをしたり(図1)、移動先の農家の園庭に木や緑を植えて、屋外の自然素材の遊具であそばせたりしています(図2~5)。

そうした農家の納屋や倉庫(図12)には、豊富に工具や道具類が揃えてあり、リサイクル素材や森で拾った材料等々を使って、様々なものを創ることができます(図13・14)。

Bornehuset Frejas Have 昼間保育所(図6)は広い敷地の隅にある建物と自然を残した広い庭(図7)があり、起伏に富んだ設計で、自然素材の遊具が置かれています(図8~10)。この保育園の特徴は大きな空間の中に小さな扉や子ども用スケールの壁をもつ空間があちこちに設けられていることで



図1 デンマーク 移動先の農家の庭



図2・3・4・5 デンマーク 農家の遊び場と建物

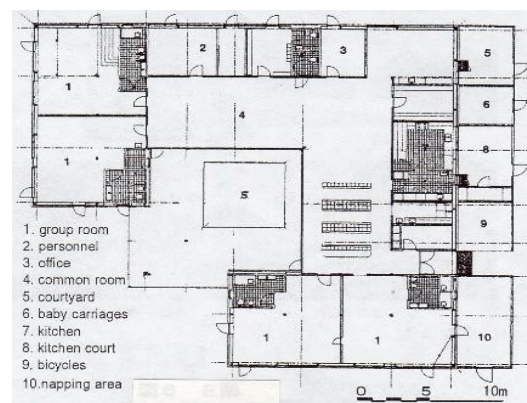


図6 平面図

図7 配置図



図8・9・10 デンマーク 広い園庭と中庭



図 11 デンマーク室内(図 6)



図 12・13・14 デンマーク 農家の納屋と倉庫内の工具、材料類



図 18 アメリカ フェンスで区切った庭・Infant



図 15・16・17 イタリア集合住宅の庭を TOTEM の園庭に使う



図 19 遊具周囲に木屑



図 20 柵やフェンスで区切る



図 23 韓国屋上の乗り物



図 24 韓国大型遊具

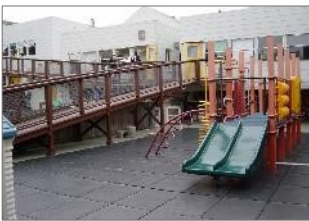


図 21 マザーグーススクール



図 22 Susan Coronade 宅

境条件が良いため芝生が張ってありますが大型遊具中心に計画されています。遊具周辺には安全のために 1m の深さまで木削片が敷き詰められていました(図 19)。マザーグーススクールの園庭はモグラの穴が空いたり、雨で汚れるため土庭をわざわざコンクリート床にしていました(図 21)。

保育ママと呼ばれる制度 Family Child Care ではライセンスを取得すれば個人住宅で 14 人まで保育が認められます。この家(図 22)でもコンクリート床を最適と評価していました。

韓国では夜間保育は 24 時間継続が基準で昼間保育所に付随して運営されていました。全て昼夜併設で 2~3 階建の低層、地下室があるのが特徴です。庭の無い園が大半で、小さな前庭やサービスヤード・砂場があるだけでした。屋上を遊び場にしていく園が多く(図 23)、大型遊具が置かれているのが一般的でした(図 24)。天気が良くても外で遊ぶ様子は見られず、外遊びは重視されていませんでした。

子どものための外部空間と言ってもそこに求める内容や評価は国によってこれ程大きく違っており、ほとんど正反対の多様な考え方が見られたのは驚きでした。

す。図 11 の正面中央扉は小さく、子ども用になっています。

イタリアの L'OASI、TOTEM などの施設ではレッジョ・エミリアの空間作りが手本として取り入れられていましたが半公立施設では専用の園庭が無く集合住宅の庭を園庭として使っていました(図 15~17)。MichyMouse1(私立)ではモンテッソーリ教育を取り入れ器械体操やダンス・ギター・バレエ等々の英才教育のためにバスまで使って移動していました。

アメリカではパルクアもレキシントンの企業内保育所も子どもの安全性を重視して園庭を年齢別にフェンスで区切り、発達年齢に合わせた大型遊具を置いていました(図 18)。

①Infant 用 ②Toddler 用 ③Pre-school 用 ④School-age 用の 4 つに分けており①はデッキ構成、②と③④は遊具を中心にした広がりのある園庭になっています。③④は特に乗り物などが使えるように、いずれも地面はコンクリート舗装がしてあります。植栽や緑よりも子どもは遊具を好むということで大型遊具中心の構成です。

Toyota Motor Manufacturing Kentucky は敷地が大きく環

■北浦かほる

大阪市大卒。倉敷建築研究所(現・浦辺設計)を経て大阪市大名誉教授。帝塚山大学教授。学術博士。NPO 法人子どもと住文化研究センター理事長。居住空間デザイン学及び環境心理学。主著書に、「世界の子どもの部屋」「住まいの絵本に見る子どもの部屋」「インテリアの発想」「インテリアの地震対策」

